



駱駝の夢

下巻

三浦哲郎

新潮社版



駱駝の夢 下巻

昭和四十九年六月二十五日 印刷
昭和四十九年六月三十日 発行

定価 八〇〇円

著者 三浦 哲郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(〇三)二六〇一一一一

振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本株式会社

© by Tetsuo Miura 1974, Printed in Japan

突風 5

砂の道 49

鈴の響く夜 115

南の旅 149

夜明けまで 213

装画
富岡惣一郎

駱駝の夢

下卷

突 風

篠崎美穂からやっと手紙がきたのは、紳一の初七日が済んだ翌日の午後であった。

思いがけない忌引休みの間に溜まってしまった仕事に追われていると、

「お手紙です。」

看護婦の村越が、いつになく神妙な顔つきで届けてくれた。封筒の裏の所番地は、東京都渋谷区千駄ヶ谷のビューティーサロン『あざみ』内となっていた。美穂は、京都にいるのかと思えば、東京のビューティーサロンとやらないのだ。

軍平は、ともかく封を切って読んでみた。

へ大変長い間ごさたしてしまいました。京都から電報を

差上げたときは、すぐに手紙でくわしく御報告しようと思っていたのですが、その後、東京へ戻りましてからは自分の身の振り方にかまけてずるずるになり、こんなにおそくなってしまうました。お許しくださいます。

あの電報、うまく間に合いましたでしょうか。間に合わなくて、御迷惑をおかけしたのではないでしょうか。実は篠崎弥一郎は、現在行方がわからなくなっているのです。私が練馬の住所を訪ねましたときは、すでに飯場が解散したあとで、建設会社も訪ねてみたのですが、出稼ぎの労働者の解散後の行方については、会社にはなんの関係もないことなので全くわからないという返事でした。

ところが、仕方なく会社を出ようとしますと、ちょうどそこへ弥一郎たちの飯場の監督をしていたという人が来合

わせまして、その人から、弥一郎はほかの二、三人の出稼ぎの人たちと組んで大阪のある建設会社の工事現場へ移るという話をしていたと聞きました。それで、すぐ大阪へいつてみたのです。

でも、大阪の会社でも、やはりどの現場にどういう労務者がいるのかわからないというのです。それで、その会社の飯場を残らず教えて貰って、自分で一つ一つ訪ねてみることにしました。随分手間取ってしまいました。京都まで足を伸ばすことにもなりました。

ちょうど京都にいるとき、そろそろ上京なさるころだと気がついて、あわてて駅からあの電報を打ったのですが……。

私の方は、結局無駄足になってしまいました。どの飯場にも弥一郎はいませんでした。もうこれ以上捜す手掛かりはなにもありません。小杉平の家の方とも連絡を取って見ましたが、弥一郎からはなんの音沙汰もないということです。もともと暢気で筆無精な人なのです。なんの音沙汰もないのは、そのせいだ——祈るような気持でそう思うほかはありません。

私はいま、『あざみ』という美容院で働いております。中学を出てから数年間、田舎の町の美容院で働いた経験が

あるからです。いちど田舎へ帰ってからと思っていたのですが、そう思うようにはいきませんでした。ほとんど着のみのまま、住み込みで働いております。ここに電話番号を控えて置きますので、上京なさったらぜひ御連絡くださいませ。

こちらはまだ毎日ひどい暑さです。アセモが沢山出来ました。』

美穂の手紙の内容は、大体軍平が想像していた通りで、大方そんなことだろうと思っていた、というのが彼の実感であった。

ただ、美穂に美容院勤めの経験があったということが、意外といえは意外であった。最初会ったときから、ただの村娘ではないと睨んでいたが、まさか美容師の卵だとは思わなかった。

その日、家に帰ると、彼は藍子に、

「きょう、アトフミがきたよ。」

といった。

藍子は、きよんととしていた。藍子はおそらく今度の事件の衝撃のせいで、物忘れがひどくなり、なにか話しかけても反応がなくなっている。

「ほら、いつかの電報の人だ。あの電報にアトフミとあった手紙が、きよう届いたんだ。」

「ああ……あの人の。」

「読んでみるか？」

そういつて、彼がワイシャツのポケットから二つに折った封筒を出すと、藍子は素直な微笑を浮かべてゆっくり首を横に振った。

息子を亡くしたばかりの女の前に、しかもその息子が死ぬことになったのは自分のせいではないかと疑っている女の前に、いきなりよその女のことを持ち出すのは酷いことかもしれないが、彼にとっては、これまで妻に対して鎖していた心の一端を開いたという意味で、それはむしろ一つのいたわりであった。

「読んだって構わないんだ。」

「いいの。あなたが話してくれるだけでいいの。」

彼は、美穂の手紙をかいつまんで話してやった。

「美容院で働くんだったら、なにも東京までいかなかったっていいのにね。」

と藍子はいった。

「そうだな。」

「最初からそういつてくれれば、あたしがフランソワへ紹

介してあげてもよかったのに。」

「そうだ。そういう手があった。」

肉親の死は人をわれに返らせ、謙虚にする。藍子は、美穂の電報をみただけであれほど邪推に耽ったついこの間の自分のことなど、まるで忘れてしまったかのようにだった。彼は、そんな藍子を、なにか懐かしいような思いで見守っていた。

もし美穂に美容師の心得があることがわかっていて、藍子がいまのように素直な妻だったら、自分は躊躇なく藍子に美穂のことを頼んだらう、と彼は思った。

「惜しいことをしたな。なにしろあの人が美容師志望だなんて、知らなかったもんだからね。」

「フランソワだったら、あたしから頼めば悪いようにはしなかったと思うわ。」

「そうだな。」

フランソワ美容室の女主人は紳一の通夜のときからきてくれて、なにかと藍子の力になってくれているようだった。彼は、美容室の女主人にも、『ラ・メール』というシャンソン酒場の女主人にも初めて会ったが、どちらも比沙子から話に聞いて想像していたような厭な女ではなさそうだった。

「これからでも遅くないんじゃないかしら。返事を書くとき、もしよかったらって、そういつてあげたら？」

「……そうしようか。」

「だって、田舎の人がいきなり東京へ出て働くって、なにかと大変でしょう？」

「そりゃあ、大変だろうな。」

「東京よりこの風巻の方がまだ増しだわ。人情はいいし、空気もいいし……。」

藍子は口を噤んで、宙に目を据えていたが、やがて不意に両手で顔を覆うと、すすり泣きをはじめた。

「どうしたんだ。」

「……なんでもないの。」

藍子は急いで涙を拭って、ちよつと笑った。

「あたし、泣き癖がついちやって……。ちよつとしたことでも、すぐ泣けてきちやうのよ。」

翌朝、彼は家を出しなに、

「そうそう、きょうからまた帰りに図書館へ寄ってくるからね。」

と藍子にいった。

藍子は、ちよつと驚いたように彼の顔をみた。

「……図書館へ？」

「そうだよ。この間までのように……。」

彼は、藍子が驚いたのは例の物忘れのせいだろうと思つて、そういつた。すると、藍子は微かに笑つて、目をしば叩いた。

「そうだったわね。あなたには、それがあつたのね。」

彼は、ちいさくうなずいてみせた。いかにも自分には、病院の勤めのほかに、やり遂げなければならぬ仕事がある。どちらも、子供が死んだからといって、よすわけにはいかない。

彼は、藍子がいつになく淋しげな顔をしていると思つたが、どんな言葉で慰めたいのかわからなくて、ちよつとの間そのまま玄関に立つていた。

「仕方がないだろう。いつまでも泣いてばかりもいられない。そろそろ元へ戻らなくっちゃね。」

結局、彼はそういつた。

「そうね。……ごめんなさい、いつまでもめそめそしてて。」

と藍子はいつた。

その日、彼は十日ぶりで図書館へいつたが、やはり前のように読書に身が入らなかつた。戦没者の手記や手紙を読んでみると、死という文字が頻繁に出てくる。彼は、い

つのまにか紳一のことと頭を一杯にして、ぼんやり活字の列を眺めている自分に、何度も気づいた。

彼は、本を読むことを諦めて、美穂へ手紙の返事を書いた。せっかくの電報はほんのすこしのところで間に合わなかったこと、だから東京の飯場を訪ねたときは狐につままれたような気持だったというようなことを書き、太三郎の兄の行方については、樂觀的な感想を述べた。

『お互い、せまい日本にいます。そのうちきつと連絡があるでしょう。』

そう書いた。

藍子が珍しく乗り気になったフランソワの件は、美穂も東京の店によりやく落ち着いた矢先でもあるし、美容院ならこの風巻にも親しい店があったのに残念なことをしたというふうに、簡単に書いた。

祖母に死なれ、頼りにしていた弥一郎も行方知れずになつて、美穂はきつと心細い思いをしているに違いない。風巻へおいでと強く誘えば、東京の店をやめてくるかもしれない。けれども、彼は正直いって、いま美穂に風巻へきて貰いたくなかった。美穂が自分の家庭を乱すような女だとは思えなかったが、ここ当分の間は、他人の世話などに心を煩わされずに、紳一の死でひさしぶりに戻ってきた家庭

の静謐^{せいひつ}をじつと守っていたからである。

おしまいに、自分の近況のなかに紳一のことを書こうかどうかと迷ったが、美穂にはなんの關係もないことだからやはり書かずにおくことにした。

『こちらは相変らずです。小生は夏バテもせずに働いています。』

と彼は手紙を結んだ。

翌日も、その翌日も、彼は懲りずに図書館へいった。三日目ごろから、目が活字にも死という文字にも馴れてきて、以前のように本が読めるようになった。

八時の閉館までいて、図書館を出ると星空が冴えて、風が肌寒いほどの晩もあつた。城山の坂道ですれ違ふ二人連れの女の方が、いつのまにか大抵カーディガンを着たり羽織ったりしているのに、彼は気づいた。

ある晩、家に帰ると、春彦がいた。

「きょう引越してきたんです。よろしく。」

と春彦は快活にいった。

九月初旬のある晩、軍平は、どこかで仕舞い忘れた風鈴の音が耳について、寝そびれてしまった。あたりが静かで空気がよく澄んでいるから、風鈴はまるで巡礼の鈴のよう

に悲しげに響いてくる。

十二時をすこし廻ったところだった。藍子は隣でひっそり眠っている。眠くなるまでテレビでもみるか、ちょうど深夜映画がはじまるころだ。そう思つて、起きてテレビのある居間へいくと、風鈴の音がさつきより高くきこえた。ちょうど頭の上の方からきこえてくる。

彼は、ちよつとの間テレビの前に立つて、居間の天井を仰いでいた。居間の真上は春彦の部屋である。

そういえば、あの風鈴はどうしたろうかと、彼は春彦がくる前から表二階の軒下に吊してあつた風鈴のことを思い出した。

いま鳴っているのは、あの風鈴かもしれない。そうでなければ、こんなに近く、すぐ頭の上からきこえてくるわけがない。

彼は、居間を出ると、耳を澄ませながら階段を昇つていった。やはり春彦の部屋の軒下の風鈴に違いなかった。彼は、春彦が眠つていても、そつと入つていつて、風鈴を外してくるつもりだったが、襖の隙間から電気スタンドの傘の色が洩れていた。彼は、指先で襖をノックした。すぐ、はい、という返事があつた。

「起きてるか？」

「ええ。どうぞ。」

襖を開けると、春彦はパジャマのまま机に向つて、なにやら分厚い本を読んでいた。

「勉強か。」

「まあね。」

軒下の風鈴が高くきこえている。

「やっぱ、ここだ。」

「なにが？」

「その風鈴だよ。どこの家かと思つていたら、自分の家だ。」

彼は苦笑しながら、

「うるさいだろう。勝手に外してよかつたのに。」

「僕はべつにうるさくないよ。なかなかいい音色じゃないですか。」

「しかし、そいつは夏のものだ。仕舞い忘れた風鈴というやつは、妙に耳につくもんでね。外そう。」

彼はそういつて自分で窓を開けると、軒下の針金から風鈴を外した。外は月夜で、隣家の柿の実が光っていた。

「これ、安物だけど、どうですか。」

春彦がそういうので、みると、ウイスキーグラスを一つ手に持っている。机の脇には、白いラベルの壺が置いてあ

る。

「なんだ、飲みながら勉強しているのか。」

「なんだか変に冷えるからね、今夜は。」

「年寄みたいなのをいつてるぞ。」

「齢に關係ないですよ、ふところの寒さは。」

ともかく、一つ貰おうかと、彼は疊にあらをかけた。

夜ふけのウイスキーは胃の腑に滲みた。

「安物って、おまえ、これは通が飲むウイスキーだぞ。」

「そうですか。よかつたら、やってください。」

軍平は、ぐっすり眠るつもりで、三つお代わりした。グ

ラスが一つしかないから、二人でかわるがわる飲んだ。

「どうだね、俺とこの住み心地は。」

彼はすこし酔って、そんなことを春彦に訊いた。

「悪くありませんよ。」

「大学の寮と比べて、どうかね。」

「そりゃあ、比べものにならない。」

春彦はそういつてから、ちよつと声をひそめて、

「……叔母さん、変りましたね。」

といった。

「そうかね。」

やはり他人の目にもそう映るのか、と彼は思った。

「なんだか、そんな気がするんだけど。」

「どう変ったんだ。」

「どうって……なんていえないのかな。」

春彦はちよつと首をかしげていたが、やがて、

「要するに、優しくなったんだ、いろんな意味で。」

といつて笑った。

「前は、怖かつたのか。」

「怖かつたつてわけじゃないけど、ちよつときついところ

があつたでしょう、前は。それが、めつきり優しくなつた

んだ。顔の感じも、言葉や態度も……。叔父さんは、そう

は思わない？」

「元へ戻つたんだよ、藍子は。変つたようにみえるかもし

れないけど、元へ戻つただけなんだ。」

と彼はいつた。

「元つて、結婚したばかりのころつていう意味？」

「まあね。そういつても、おまえには憶えがないだらうけ

ど。」

そういつてから、彼はふと思ひ出して、

「そうだ。俺の結婚式のときの男蝶は、おまえがやつてく

れたんだっけね。」

「そうですよ。僕が男蝶で、里ちゃんが女蝶だった。」

「そうだった……。」

「あのときは、僕はまだ小学生で……五年生だったかな。六年生だったかな。」

「里ちゃんは中学の一年生だった。」

「じゃ、僕は里ちゃんの一年下だから、六年生だったんだ。」

「坊主頭の、頬っぺたの赤い子供だった。憶えてるよ。」

「僕だって憶えてますよ、叔父さんたちのこと。」

二人は、互いにちよつと首をすくめるようにして、ひそひそと笑い合った。

男蝶女蝶というのは、田舎風の結婚式で三々九度の盃事をするとき、親戚から選ばれて酒の注ぎ役を勤める少年少女のことである。軍平は、栗野の生家で昔風の結婚式をしたが、そのとき男蝶になってくれたのが春彦であった。

「僕はあのとき、生まれて初めて紋付きというのを着て、袴を穿いたな。」

春彦がそういうので、

「俺だって、そうだ。袴なんて穿いたことがなかったから立つとき、うしろの裾を踏んで、尻餅を突いてしまった。」

と軍平は笑っていった。

「それに、叔父さん、里ちゃんにお酒もつと注げっていっ

たでしよう、三々九度の盃のとき。」

「……そうだったかな。」

「里ちゃん、そういつてたもの。ほんのすこし注ぐだけでいいからっていわれてたのに、叔父さんへ注ごうとすると、すくない、もつと注げっていわれて、びっくりしたって。里ちゃん、そういつてたもの。」

「思い出した。それが兄貴にまできこえて、花婿がそんなことをいっちゃいけないって、大きな声で叱られた。」

「それで、みんな笑ったんだ。」

そうだった。和氣靄靄として、よい結婚式だったのだ。

——彼はそう思うと、なにか胸が痛むような気がした。

「そういえば、あのときの叔母さん、いかにも優しそうなお嫁さんだったな。若くて、きれいで、初々しくて……。」と春彦はいった。

彼は、黙ってグラスのウイスキーを喉の奥へ流し込んだ。

「……要するに、あのころまで戻ったってわけだ。」

と、彼はちよつと間を置いてからいった。

「今度の紳ちゃんのことで？」

「だと思ふね。それ以外には、考えられない。」

春彦はしばらく黙っていたが、やがて、

「叔母さんは、あの日のことをよく憶えてないらしいです

ねえ。よっぽどショックが大きかったんだな。」

と目を伏せたままいった。

「そうかもしれないな。藍子がそんなことをいつてたか？」

「はっきりはいわないけどね、ただ、あの日のことをくわしく話して頂戴って、僕、二度ほど頼まれたから。」

軍平は意外な気がした。

「……おまえに話してくれって？」

「そうなの。叔父さんの方がよく知ってるんだから、叔父さんに直接訊いたらよさそうなのだけど、とにかく話して頂戴って何度もそういうもんだから……。」

「話してやったのか。」

「ええ。僕が聞いて知っていることをね。」

「二度も？」

「二度も。おなじことを。聞いても、すぐ忘れてしまいうらしいんだよ、叔母さんは。」

あの日、春彦は栗野にいなかった。春彦が栗野へ帰ったのは、軍平たちが紳一の遺体を車に乗せて風巻へ帰った日の夕方であった。だから、あの日の出来事について春彦が知っていることは、すべて後日になって軍平や父親の勝衛から聞かされたことばかりなのだ。

「……で、藍子は？」

「二度とも、黙って聴いてましたよ、揺り椅子で。」

藍子が自分に話してくれと頼まなかったのは、自分に対するいたわりだろうと彼は思った。遂に紳一を助けることが出来なかったという悔いを残した自分に向って、あのときのことを思い出して話してくれとは、とても藍子はいえなかったのだ。

「……泣いたろう、藍子は。」

「いいえ。じっと天井をみつめていただけ。なんだか、僕の話を聴きながら別なことを考えてるみたいだったな。」

自分の前では、紳一のことをいい出すとすぐ泣き出してしまふ藍子は、涙を一滴もこぼさずになにを考えていたのだらう、と彼は不思議な気がして、黙っていた。

「考え事っていえば、なにか、しよっちゅう考えてるみたいだな、叔母さんは。」

「……そうか。」

「比沙子ちゃんと呼んでも、気がつかないで、とんでもない方をじっとみていることがある。」

彼はちいさくうなずきながら、当分は仕方がないなと思った。仕事を持っている自分でも、いつのまにか、あらぬ方へ目を据えて放心していることがよくあるのだ。いずれ

時が心の負担を軽くしてくれるだろう。そのときまで辛抱強く待つほかはない。

「子供を亡くした悲しみは、親になってみなければわからないというが、本当だよ。まあ、そっとして置いてやってくれ。」

と彼はいった。

また、ある晩。

彼は寢床のなかから、三面鏡に向って寝化粧をしている藍子に、おい、と声をかけた。藍子は、無言で鏡のなかから彼をみた。

「おまえ、子供が欲しいんじゃないのか？」

藍子は目を伏せて、微かに笑ったようだった。

「どうして？」

「べつに、どうしてってこともないんだが……。欲しいんじゃないかと思ってさ。」

藍子は黙って化粧をつづけていたが、やがて、

「あなたは？」

と、彼の顔はみないでいった。

「俺は、どちらでもいい。おまえが欲しいなら、作ってもいい。」

藍子がいつまでも黙っているのを、

「欲しくなったら、いつでも、あのオーデコロンの匂いをさせてくれ。」

と彼はいった。

けれども、オーデコロンの匂いのする夜よりも先に、あの日がきたのだ、突風のように。

その日——九月下旬の金曜日の夕方、彼は、病院を出ると、まっすぐ曙台の家に帰ってきた。そのころはもう、図書館にある必要な本はあらかじめ読み終えて、ぼつぼつ本の原稿書きに取り掛かっていた。

家では、春彦と比沙子が庭に出て、ゴルフの真似事をして遊んでいた。彼は、柵の外から、ただいま、と声をかけながら、おや、紳一はどうしたんだろうと思いかけた。

紳一がいけないことにはもう馴れたつもりだったが、こんな場面にあつかると、まだ、おや、紳一は——などと思ってしまう。

「お帰んなさい。」

「お帰んなさい。お母さん、お出掛けなの。」

と比沙子がいった。

「そうかい。」

藍子はよく、夕食を食卓に並べる段になってから、醤油